ア文学集・31

日本プロレタリア文学集・31

本庄陸男、鈴木清集

本庄陸男、鈴木清集

日本プロレタリア文学集・31
本庄陸男、鈴木 清集
定価 二八〇〇円
一九八七年 四 月二十五日 初版©
発行者 松 宮 龍 起
発行所 株式会社 新日本出版社
〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三二〇—七一一一
振替 東 京 三—一三六八一
印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社
第二十四回配本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

ISBN4-406-01504-3 C0393

日本プロレタリア文学集・31

本庄陸男、鈴木清集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

本庄陸男

北の開墾地……七
移住する彼の家……一九
馬と人間達……二八
過剰なる弟達……三五
秋空の下……四九
香山の顔……六八
歓迎会……七三
手紙……七八
春のない春……八三
白い壁……一〇六

橋　梁……一三三

鈴木　清

火を継ぐもの……二三二
母たちの示威……二五六
三ツの死……二六八
監房細胞……三〇〇

解　説……松澤信祐……四三三
発表年月日と掲載文献……四五一

本
庄
陸
男

北の開墾地

一

三日に一遍も、来るか来ないの郵便脚夫――それが珍らしく、ペチャンコの鞄を腋の下に抱えて歩いて来た。

「何ぞえな？　郵便はんじゃが――」

「さあ、わからんな。」お加代は被っていた手拭をほどいて、額の汗を吸い込ませる。金時鉞の柄を立てて、一先ず枝払いをやめた。和吉は手前に挽いた鋸をそのままに立ち上る。そうして夫婦は、ベラベラの垢と汗を、焦けた顔面になでまわした。消息を齎しに近づく郵便脚夫を眺める。谷川沿いの申訳だけの粗末な路を、其処から山裾によった傾斜の伐木仕事場まで、歩みよるのに爪先上りは時間を取った。にたにた笑いながら、脚夫は、出ッ歯の上に顔の造作を集めた和吉の、すぐ前に立ち止った。

「何ぞ用かいな？」

「手紙を持って来たんですわい。」

「ほう――」と和吉は珍らしがった。「誰からぞえな？」とお加代が口を挾むのを、裏をかえした和吉は、「珍しいこと、良太はんじゃ。」「良太？　へえ――」そして顫えた女房の声である。お加代は不安な動悸を聞いた。「何ちうて来たんだろう。早う読んで見て呉れんか。」

茶色の封筒の頭を、ベリベリと、封は兎に角破ったけれども、そうして中から細罫のレターペーパーは出したけれども、和吉には、稍々持て余す万年筆の走り書である。

「郵便はん。済みませんが、読んで見てお呉れんか。あんたはよう字がわかる。――此方は開いた盲です。ヘッ、ヘエ――。」

「ほんまにお願いしますわ。」と女が添えた。

「上手な字じゃな。」脚夫はそれにお世辞を入れて受け取った。字を拾った。

「上手な筈じゃ。此の石上良太というのは、私の家内――これの――とお加代を顎で指して――弟でな。高等小学も出て居るし、軍隊に行って上等兵じゃ。子供の時からよう出来てなあ――」

二枚の洋紙はギラギラした。真上の陽光に瞼を細めて、お加代は脚夫の眉を見た。

「そうでしょうな。この手なら――じゃ読みますぞ――」

脚夫が拾った文字の意味は、女の胸を打ちのめす、凶い報知であった。移民募集に釣られねばならなかった内地を、追い出された二年目、屹度、こんな蒼惶な突然な手紙なら不吉に相違ない。

「トンベツまで、船に積まれて来たというのだ。それから先の路が分らぬ。――身体を痛めて居る。暫く此方に来て手伝いたい。それで是非にも迎えに来てほしい――とな、そう云う風に書いてありますな。」

「おおけに――」頭を下げて、お加代は和吉の顔色を上眼づかいに掬い見た。「病気？　どんな病気をしとるんだろう――。」

「でもええわい。良太はんが来て呉れたら、伐木の方も開墾の方も、ずいぶん捗が取るぞ。明日早速行って来う――」

郵便脚夫が帰った後で、いろいろな推憶が二人の口から並べられた。が、明日になればよう解る。今日はこれだけ片附けならん。二人は仕事の持場についた。切り払った小枝を、焚火の中に投げ入れ投げ入れ、お加代は良太の顔がむくんで見えた。牛の様に強くて、それで情深かった弟が、病気に負ける筈はないが――和吉の鋸の音が冴えて来た。

「母あ。母あ！　赤子が泣いてかなわんわ。」

拝み合せの開墾小屋から、長男の甚吉が駈けて来た。背中に括りつけた赤ん坊が、わめき立てて反りかえった、首の垢がよれた。

「阿呆ッ！　もちっと負うとれ！　今此の枝だけ切つってからにするんじゃ。」

「泣いて仕様がないんじゃ。なあ、おっ母あ。俺、腹がへったぜ！　ひもじいな。」

「腹減ったら、いたどりでも取って食え、一杯あるわ。」女は頬りに鉞を振りまわす。生木の枝は一振り毎にきれいに落される。「何でもかんでも、今年一杯に拓いてしまわなならん山じゃ。附与にならなんだらどうしようぞ。お政府の附与が駄目だったら、死んでしまわなならんのぞ。そしたらもうどうにもならんのぞ。ええ子じゃな。もちっと負うとれな。」

小作奴隷に産みつけられた女と、五尺八寸の男の体骼との、骨の油まで絞りつくした労働であったが、生れた土は彼等の生存を拒絶した。内地から追い出されて、彼等の唯一の目的は、三年間の期限を切られて、此の谷峡の原始林

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を耕作地に征服することにあった。お役人の認可を得れば、五町歩一戸分が、自分の所有地になる。草の根を食い乍ら、二年を頑張た。土地の半分があかるくなった。残り二町歩の原始林を、少くとも立木だけはどうしても伐り倒さねばならぬ。油断がならぬ。お加代和吉の類例は無数にあった。手蔓にすがった移民希望者が貪欲な目をして押しよせているのを知っている。規則違反に仮借はいらぬ。政府は——気まぐれな検査官は需要過多を知りすぎて権力を使うことが出来る。認定、没収——取り上げられる。取り上げられたら？　取り上げられたらと脅え立って、彼等は立木に突貫した。食わなくともよい、一旦附与になったなら金がみのると余儀ない信心を持った。

「阿呆ッ！　お母あ。いたどりやかし食うても腹は起きんわ。赤子投り出して失うぜ。」

「もうちっとな。我慢せいよ、なあ甚。ほら見いよ。甘そうないたどりやないか——」

お加代は子供に譲歩して藪に這入った。せせらいでいる川べりに、水っぽく肥えたいたどりの一本を引き抜いた。青い茎のふくらみを口に入れてさくさく嚙んだ。口一杯に青い汁を馬のように吸い込んだ。

「これ見い——、これ見い、甚吉よ。」と、女は七歳の伜に切願する。黒澄んで葉を茂らした立木を見かえり、その未墾地の辛苦を披瀝するのだ。「此の山みんな拓かなならんのじゃ。山が開けたら、甚に馬一匹買うてやろ。ええか、日の暮れまで負うとれな。」

二

幅五十間の山峡である。彼等の小屋は此の沢のどんづまりにあった。川下六百間の先に隣家があった。彼等より三年前に移住したその家水村は、唯一つの隣り家で、しかも熊笹の根がわな張った山の尾一つの向うになる。

だから、キンキンする夜となる。一寸話を切ると、背筋の所で、ずんぐり立った生臭い闇が脅迫しているのだ。

囲炉裏に山程木を焚いた。焚火の光りで、ぽやりぽやりと顔が光った。框に腰を下して足を灰に投げ込んでいる。云うことが済んでしまった。女は重荷を背負い込んだと思ったが、そうして、何ぼ姉じゃと云っても、此の土地の現在の状態は、姉弟とか親身とか云う暇のない時だとも思ったが——

「そんならお前、手伝いやかし出来ゃせんなないかい。そんな身体では？」

動きさえ取り兼ねる良太は顔を上げなかった。今日一日を義兄の肩に縋らねば来ることができなかった。自分の意志に背き去った病軀である。けれども、「まあ、出来るだけのお手伝いはする積りで居りますけんど――。」

「何じゃい。手伝うてなんか要らんがな。けんど、寝んで居て貰う所もないような、――」和吉は荒筵の床の上を首で示した。子供がすうすう鼾をかいた。

「寝るに蒲団もないんじゃ。ええ、まあ、これから暖うなるから我慢するわ。」足の灰を払ったお加代は、男達の後でごそごそ動いた。

「漁場も駄目かや。此方も辛いわ。」その和吉の話しかけに、良太はむくんだ顔を重たく上げて、黒味の多い瞳をぎょろつかせる、そうして吐き出した。

「仕様がないんですな。内地には帰れませんしな。帰っても居る所もありませんしな。」

その時背後からお加代の声だ。「良はん、早う丈夫にならな、どうもならんぜよ。一遍お医者に診て貰わんせ、な。まあ、今夜は寝んせ。疲れたろうわ。床敷いたけに寝んせ、寝んせ。あんたも寝んせよ。」

根木に燃え入った炉火の焔が延び上った。その明るみで、この遠来の客のために設けられた寝床が見えた。垢に光った蒲団が見えた。三尺隔たって、袢天やら外套やら毛布やらの寝床の中に、お加代は長くなって赤子に乳を含ませた。甚吉との間に木枕を据えながら、「良はんよ、良はんは其処に寝てお呉れな。あんたは此処。」

「済みませんな。寝ませて貰いましょうか。」良太は糸目のほぐれた黒繻子の腹掛けを外し出した。それは紺雲斎織でないだけに、強健な労働力がものを云う漁場の型録である。漁夫小頭であった頃の頑固な良太の形見である。

――「一体どれだけ働いたら生かして呉れる世の中だろう。だが遊んで食うとる奴も居ることは居るんだ。馬鹿にしている。」だが、これは良太の独り言になっただけで返事はなかった。

翌日、良太は窪んだ大きな瞼を拡げて、粗末な開墾小屋を見た。煤けた柳行李と、囲炉裏の向うに鍋が転がっていた。背中を立てて良太は脚を出した。昨日一日の強行軍が、彼の脚を殺戮した、腐蝕させた。指で抑えるとぶゆぶゆするのを、両手の掌で交る交る愛撫した。脚の腫脹が腹を抉って迫って来る。重圧される胸苦しさが後頭部を揺すぶった。隙間だらけの屋根から洩れ込む光線が、窓のない小屋の中で淀んだ煙に、沢山の竪縞を折り込んだ。その紫がふ

らふらして良太は床に仰向いた。眼球が窩に引きずり込まれた。

「母はんがな、叔父さん眼さめたら、飯食わんせと。鍋に這入っとるんじゃ。」

良太は眼を開いて笑おうとしたが、唇が引きつるのでやめた。「飯食わんせよ。叔父っさん。」甚吉は云い置いて床から土間に跳ね下りて戸外に飛び出して行った。荒筵から舞い立つ埃が、光線の縞の中で狂い立った。

信玄袋只一つ、それが良太の私有物であるだけだ。這い出して、彼は中から糠精の瓶を摑み出した。彼が唯一の脚気快癒の懇願は、この糠精一瓶にありながら、その瓶は半分を空にして、褐色の空虚が見透かされた。生れた土地の水に戻れば、脚気は癒ゆると知っていた。土地の相違が効果を齎すとは理解していた。——だのに、内地に帰って行けなかったのだ。鎮守の神も糞喰えだ。身一つを扱い兼ねてしまった現在、千万の希望をつないで漂いよった姉の家——義兄の家である。和吉お加代の密着が起した悶着を、どんなに心配してやった良太であったにしても、それは此処では問題でない。曠原、移民地に漂浪してただ金銭だけが造る情愛以外を予期しなかったし、又全く、姉夫婦は、来一年の期限内に二町歩を開墾せねばと必死なのだ。一戸分の土地所有者になる切望は、良太に対する親愛の量を忘却していた。食い物の欠乏と仕事の邪魔との厄介者だ。

丈なす雑草の中に、ひょろひょろ芽生えた裸麦の一段歩ばかりがある外に、収穫を見込める耕作地を持たないのを良太は知っていた。一杯の麦飯を呑み込み兼ねて、良太は糠精を水で流し込んだ。

三

立木一本伐採されると、それだけ地面が陽の光を見る。小枝一つを灰にすると、畑地が、それだけ拡げられる。熊笹の根一本引き抜くだけでも土が耕されるのだ。

ズシン、ズシンと、立木は地響き立てて、伐り倒される。大木は年代を経て肩を並べた。根元を挽かれたとも木が、傲然と拡げた梢の先で広い空気を搔きまわす、ヒューッとうなった幹が身ぶるいする。その瞬間に、和吉は鋸を手早く引き担いで十間後ろに跳び逃げる。切断された木口がミリミリ泣いて、木目にそってシャリッと裂かれたと思うと、思い切り図体を地面に敲きつけて大木が倒れるのだ。ザアーと一鳴り周囲の立木が戦慄した。いたどりが押し潰ぶされ熊笹がたたかれた。草の葉の蠢めきが落ちつくと、まだ

痙攣するたも木に、和吉とお加代は殺到する。そして男は鋸で胴木を切りくずし、女は鉞を振りまわして枝をたたき切る。

阿呆、吐かせ！　阿呆吐かせ！

辛度いやかし云わせるものか！

背中に結び付けられた、重い赤ん坊を左右に揺振り乍ら、小屋から出て来た甚吉は、父親の鋸挽く傍に突っ立った。

「叔父さんがなあ——」云いかけて甚吉は、挽き伐られて行くたも木が、鋸の歯から吐き出すおが屑の美しさと木の香を味わった。「よう切れるな。お父う、俺にも一寸挽かせて呉れるか？」

「馬鹿云え！　お前等に此の鋸が動かせられるか、——和吉は手鼻をかんで——何じゃお前？　叔父さんがどうしたん？」

「お医者はんに行きたいんじゃと。お医者に行ったら癒ってお父のように働くんじゃと。」

「お医者じゃ？」立ち上って和吉は妻を呼んだ。「良はんお医者に行きたいじゃちゅうぞ。」

「困るんないか——」とお加代は歩き寄った。

「お医者に行く云うて、内地みたいに行きはせんわな。そして、——」と、伜を見て、

「叔父さんどうしよった。」

「大きな眼をして寝とるわ。せこい（苦しい）せこいと呻っとるわ。お医者に行ったらな、お母あ、なおるんけ？」

「そりゃあ癒るが——お医者に行く銭はどうするつもりか知らん？」

「銭は持っとるけん、どうぞ連れて行って呉れと頼うてちゅうたんじゃ。」

「そうか、そうか——」とお加代は安心した後で、「可哀そうになあ——」

「お前、一寸家に帰んで看て来いや。」

「そうかい。そんなら」お加代は亭主の注意で同情を感じた。甚吉の背中から赤ん坊を抱き取って、小屋に歩き出した。

甚吉は軽い背中がうれしかった。母の置いた鉞を持ち上げて、小枝を二三本払いかけたが、小供の力はそれを遂行させなかった。彼は鉞を投り出して立木の暗がった藪の中に走り込んだ。山そばの熟んだ実を捜すために、五尺の蕗が密生した湿地の広葉の下を、ざわざわもぐり込んで消えた。

「甚吉ッ！　熊が出るぞ！　熊に食われても知らんぞッ！

甚吉ッ！」

背後に聞えた父親の言葉はどうでもよかった。少年は熊よりも背中に一日中結かれる赤坊の重さが恐ろしかった。山には山そばがあり、オバイロがあり、青い葡萄の鈴なりがあった。

四

山裾を一つまわった下の家から、借りて来た道産馬だ。その馬のどたどたした背中に莚を二枚敷いた。その上に毛布を敷いた。たてがみに嚙りついて跨った良太である。和吉が其の手綱を握った。

「ええか、良はん、大丈夫かい？　引き出すぜ。苦しくなったら休むけん、な。ええか」病人の首が落ちて頷いた。

「そんなら気を附けてな。ようくお医者に見て貰うて来んせよ。な。よう診て貰わな損になるぜよ。それにこんな不便な所じゃから、ちょくちょく行かれるわけじゃなしな。薬も沢山貰うて来いよ。――そんなら気を附けて行っといで。」云い置いて、女は時折り冷たい情愛を感じた、がそんなものは何もならない、良太は金を持っていた。蕪雑な漁夫の生活の中に、こんな日を見越した金の若干である。先ず助かった、金を持っている親身の介抱であったから――そうして彼女は、馬の背中にへばりつきながら、路に消える後姿を眺めた。再び帰ることの出来ない内地の姿がチラと見えた――その頃の良太の健康な様子、肩に星を三つ着けた上等兵良太の帰村。その名誉は少しも金にはならなかったから、結局其処にも居たたまれなかったのだ。白壁の倉庫が三つ。地主の因業爺。執達吏――

「おっ母あ。あんな馬、何故、家に居らんのだろう。馬ほしいな、なあ。おっ母あ。」

甚吉は、お加代の着物を引っ張った。

「銭がなけりゃあ、何にも買えんわ。さあ甚！　ちっとでも手伝いせえよ。早う金持ちにならなどうもならん。」

お加代は伐木に駈けて出た。

夕方――

「ほら、お母あ見んせ。二人乗って来たぞ。馬は強いな。ほら――」甚吉が注意した。女は仕事をやめて路に出た。和吉の背中に抱きついた病人を受け取った。和吉は一たん馬から下りて、手綱を切株に結いつけた。ぐにゃぐにゃする身体を貴重品のようにかかえて、二人は小屋に這入った。

「苦しいかえ？　良太はん。困ったな。ほんまにどうしよ

うぞ。」お加代の声が顫えた。
馬は首をのばして草を掻き入れる。厚ぼったい広い唇が、パクパクして、その中に大きな歯と赤い歯齦が見えた。少年は、横目を使う馬の顔を眺めたが、そのうち思い立って、ようやく穂を孕んだ裸麦の一握りを抜いて来た。それを馬の鼻面に突き出した。馬は大口を開けて、バサバサ舌で支えながら食い初める。涎が出るほどうまそうに、咽喉を通る動きが首筋に見えた。少年は、もう一と握りの裸麦を畑から抜いて来た、そうしてそれを馬の鼻面に近よせた。
「馬鹿ッ！　何しよるッ！」
驚いて甚吉は取り落した。振り向けた顔のほっぺたを背後に立った和吉の掌が、グワンと一つ喰わした。
「折角作った麦じゃないか。此の麦だけよか収れんのじゃ。此の麦がなけりゃあ、冬の間の食うものがないんのやぞ！阿呆め！」
べそを掻いた甚吉の頭の上で、父親は怒号した。馬はそれらにお構いなく、ジャリジャリ食い上げた。頸をのばして長い眼をゆっくり開閉した。
「分ったか？」
「ウン。」
「わかったらよし。そんなら馬をかえしに行くからお前を乗せてやろ。落ちんなよ。」
だき上げられて、伴は馬の背中を股に挾んだ。裸馬の背中からその体温が股倉に匍い上がる。シッシッシュと追い立てて、子供は明るい世界を見た。
「困ったのう――」と云い続けて、お加代は粥をまぜる、そして、その米の香気を享楽した。ぼやぼや見えるお加代と、良太の寝姿である。診察料の一部で買った二升の米の、僅かばかりを粥にした。
「大丈夫ぞえ、確っかりしとらんせ。たかが脚気じゃ。荒い仕事をしとったから、しんが疲れて居るかも知れん。」
囲炉裏に踏み込んだ和吉の慰めは、良太に微かな頷きを見せた。
「それで――」とお加代は引き取った。「お医者はどう云うたん？」
「ちっと許り心臓に来とると云うたが、藪じゃからわかるもんか。心配するな。」
股をひろげて炉に足を投げ込んだ甚吉は、和吉の話の切れ目に彼の要求を出した。
「寝むとうなった。飯食いたいな。お父う。」
「俺も腹が空いたぞ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com